様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２６１１

研究課題名（和文）アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological study of resource-getting behaviors among hunter-gatherers in forest of tropical Africa

研究代表者
彭　宇潔（Peng, Yujie）

国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・プロジェクト研究員

研究者番号：７０７９１２１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アフリカ熱帯雨林地域の狩猟採集民の生態学的領域での行動が決定される過程を、生態、社会、行動の関係で説明するための人類学的な解釈モデルを構築した。具体的には(1)バカ・ピグミーたち個人に対する移動・移住史の聞き取りに基づく社会関係の調査と（２)キー・インフォマントに対して環境知覚に関する追跡調査を行った。その結果、個々人には生活領域内の自然環境に対する利用の経験と範囲の差で生じた知識の差は、集団で活動することによって個々の知識と認識が多様な形で共有され、一定範囲内で共通する知識・認識になることが可能になるという結果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究には、カメルーンのバカ・ピグミーにみられる生態学的領域での諸活動を対象に、生業活動時の人々の行為を、とりわけ彼らの社会関係に留意して分析をした。こうして得た研究成果は、現代の狩猟採集民社会における資源獲得と社会制度との関係を、量的かつ質的民族誌データの収集と分析を通して、立体的かつ動的に解明した。また、可視化することを通して、文化実践の継承と変化は集団内と集団間における人々の相互作用を明らかにし、狩猟採集民社会の変容をモデル化にすることが可能になった。

研究成果の概要（英文）：In this study, I developed an anthropological interpretive model to explain the process of determining the behavior of hunter-gatherers in the ecological realm of the African rainforest region in terms of the relationship between ecology, society, and behavior. Specifically, I conducted (1) a survey of social relations based on interviews with individuals (Baka Pygmies) about their migration histories, and (2) a follow-up survey of key informants about their environmental perception. As a result, it was found that the difference in knowledge caused by the difference in experience and range of use of the natural environment within the living area of each individual. But it can be shared in various ways by group activities, and that it is possible to become common knowledge and perception within a certain range.

研究分野：文化人類学、アフリカ研究、狩猟採集民研究

キーワード：狩猟採集民　資源利用　社会関係　集団行動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

アフリカ狩猟採集民に関する研究の多くは、乾燥地域に暮らすブッシュマンとハッツァ、熱帯雨林地域に暮らすピグミーを対象として行われてきた。これまでの研究で主な主題となってきたのは、野生の動植物に依存した生業活動、医療や環境に関する民俗的な知識、小規模で親密な人間関係からなる社会構造、そして近隣民族との関係などである。これらの研究からは、彼らは異なる自然環境において生計を営んでいるにもかかわらず、物質的・知的財産の共有や権威の不在といった、狩猟採集社会に共通する平等的な性格を持つと論じられてきた(e.g., Woodburn, 1982)。日本におけるアフリカ狩猟採集民研究では、京都大学の伊谷純一郎や田中二郎などの先駆的な人類学者の影響を受けてフィールドの様相を緻密に記録する生態人類学的アプローチが確立し、上記の主題と関連しつつ展開してきたことが特徴である。さらに2000年以降になると、ピグミー研究においては、狩猟採集社会自体の急速な社会変容を背景として、若手・中堅の研究者たちが狩猟採集活動や儀礼、シェアリングなどの古典的なテーマを踏まえながら、ポスト狩猟採集民の特徴を論じる研究が数多く行われてきている。

一方、従来のアフリカ狩猟採集民に関する研究は狩猟採集民の主体性を無視してきた、とりわけ狩猟採集民がどのように自然環境を感知・認識し、そうした自然環境が彼らにとってどのような社会的・感情的な意味を持っているのかを十分に明らかにしてこなかった、という批判的検討が近年行われている(Hewlett, 2014)。たとえばこれまでのピグミー研究は、経済学的・生態学的なアプローチから、彼らがどのように自然環境を利用しているのか、それが持続可能なのかを量的な指標を用いて明らかにしようとしてきた(e.g., 寺嶋 2010)。しかしながら、狩猟採集民が日常的に行っている生業活動に必要とされる、自然環境についての鋭敏な知覚やその資源の効率的な利用は、実際には生態学的な環境に埋め込まれているのであり(Ingold, 2011)、人々の集合的アイデンティティの形成と密接に結びついている(Takada, 2016)。そうした環境利用の諸相を、その当事者の視点や社会性から読み解こうとする研究は十分に行われてきたとはいいがたい。

２．研究の目的

本研究の目的は、カメルーン東南部のピグミー系狩猟採集民バカの生態学的領域での行動を映像で記録し、それらの行動が彼らの社会関係にどのように影響されているかを定量的に分析し、バカ社会における社会関係と行動パターンとの相関関係を精確に示すとともに、それらの決定づける思考論理を社会関係の脈絡で説明するための人類学的モデルを構築することである。

具体的には、バカ社会の中で行われている個人猟や集団猟、果実や薬草などの採集、また、近隣集団との接触の中で行われる労働などといった広義の生業活動時の行動を精確に分析したうえで、前述した社会関係との相関関係を検証するとともに、バカがそうした生業活動と社会との関係について行う説明を合わせて調査し、客観的な定量解析データと彼らの視点からの記述的分析とをつなぎ合わせることによって、狩猟採集民の生業活動、生態資源の獲得に関する人類学的なモデルを提示する。

３．研究の方法

1) バカにおける多重な社会関係

基礎的調査として、氏族に関する伝説や民話、親族・婚姻に関する規則と禁忌について聞き取り調査と事例収集を行った。居住地ごとの規模とメンバーを定期的に記録し、流入した人と流出した人について、彼らが来たところと移動先との関係について具体的な聞き取り調査を行った。各個人間の社会関係を徹底的に把握することで、各種行動がどのような社会関係に裏打ちされているのかを明らかにすることが期待できる。特に、居住地におけるメンバーの出入りは新たな社会関係にもとづく行動の変化につながる可能性があることから特に留意した。

2) 人々の行動に関する基礎的調査

①個人間の社会関係が明確なメンバーをキー・インフォーマント(以下、KI とする)とし、各KI にアクションカメラを前額部に固定してもらい、あわせて高感度の GSP トラッキング機を携帯してもらい、生業活動を中心とした行動の一覧の過程を記録した。KI を中心した生態環境内での諸活動の一連の過程の詳細を映像、音声で記録するとともに、その時間情報と位置情報も同時に記した。このデータを用いた行動学的な分析を通じて、個人レベルにおいて、当事者視点からバカたちは自然環境をどのように見たり聞いたりし、どのようにその中から情報を選んで利用し、どのような社会関係にある他のメンバーや、他の集団のメンバーにそれらの情報を伝達しているのかを解明するための基礎資料を収集した。

②項目①では申請者も参与観察を行った。申請者は主に集団で行動している場面をビデオカメラと音声レコーダーで記録し、相互行為についてのデータを収集した。特に着目したのは、共同行動をしているメンバーたちが分散して行動する場合、メンバーの中で活動のリーダー格もしくは先導役を果たす KI の行動に留意して、詳細に記録した。

４．研究成果

2018 年度

2018 年度は 12 月から 1 月にかけて約 3 週間渡航して、カメルーン東南部で約 2 週間のフィールドワークを実施した。主には(1)バカ・ピグミーたちが獲得する対象の資源の地理的情報の収集と、(2)バカたちが利用する森の中の道と資源の位置に関する知識の聞き取り、(3)個人に対する移動・移住史の聞き取り、そして(4) KI に対して環境知覚に関する追跡調査を行った。資源の地理的情報とそれに関連するバカたちの知識については、彼らが主に川と地形を目印に覚えて、他者との共同経験を語ることによって情報を共有するということがわかった。その調査結果を、2018 年 5 月の日本アフリカ学会において口頭発表で報告した。また、個人の移動・移住史については、主にその個人の婚姻状態と共同居住者との人間関係は個人の移動・移住の理由になることがわかった。また、環境知覚の追跡調査については、本来計画した KI にカメラを設置することをやめて、調査者(研究代表者)につけて KI の行動を撮影する方法に変更した。変更後の調査方法は KI を含む集団活動のメンバーを多数撮影することができ、KI に対する行動研究により良い方法だと考えられる。この調査を通してバカたちは森を歩く実践の中で周囲の環境を知覚するには主に視覚と聴覚に頼っているが、嗅覚にもしばしば頼っていることが明らかになった。

2019 年度

2019 年度には 8 月から 9 月にかけて約 3 週間のフィールドワークを実施した。主には 1)狩猟採集民バカを対象に、道路沿いでの定住村のメンバー構成と、採集のための一時的な採集キャンプのメンバー構成及びそこまでのルートと対象資源の位置を記録した。2)焼畑農耕民ンジメを対象に、定住村のメンバー構成、メンバーたちのほかの親族の居住地、ンジメ語における親族名称及び親族メンバーの個人名について聞き取り調査によって記録した。

具体的には 1)の居住地とメンバー構成について、定住村では短期から中期でのメンバー構成が固定しているが、長期(10 年以上)でみるとメンバーの入れ替えが起きていた。一方で、一時的な採集キャンプでは、構成メンバーは短期でも流動性が高いが、採集キャンプの位置は数年経ても変わらないことが多いことが明らかになった。2)の農耕民の社会構造と居住形態に関しては、親族間の居住距離が広がる傾向がみられる。ンジメでは特定の親族が子どもの名づけ親になる慣習があるが、そうした親族間の関係は彼らの居住地や移動先が決められることはない。女性の結婚による移出以外、生業活動(畑や出稼ぎなど)によって居住地が決められるのがほとんどである。また、農耕民は親族間の訪問はバカほど頻繁ではないが、労働力の借用による親族間の移動がよくみられた。上記の 2)で集めた焼畑農耕民の事例をバカと比較しながら、アジアの事例とも比較して通文化的な分析をした結果を、2020 年 2 月のアメリカ通文化研究学会でポスター発表をした。また、環境知覚に関する投稿論文は、映像に基づく行為分析及び参与観察で得た事例の整理が終了して、論文執筆の作業に移行した。

2020 年度

2020 年度には COVID-19 感染拡大の影響を受けて、海外での補足的な資料収集が実施できなかった。実施できた研究内容は、主に、1)これまでのフィールドワークの追跡調査で収集した映像データの通時的分析と、2)狩猟採集民バカたちが集団活動時の地理的地勢的情報の整理と分析であった。1)に関しては、果実の採集・加工に関する集団活動において、参加者たちにみられる相互行為を分析した。その結果、個々人に見られる作業の開始や一時的休止、再開などの進行ペースは、同じ場所で同じ作業をする他の人々の進行ペースと互いの関わりによって影響されることを明らかにした。とりわけ、同時に加工作業をする人数によって、相互の行為に影響する程度が異なることを明らかにした。また、森で活動するときに、利用可能な資源や遭遇する人々との交流に聴覚の活用の様相を映像データに基づいて分析し、その結果が学術図書のコラムで掲載されることになった。 2)に関しては、1)のデータも加えて、森を移動する集団活動時に参加者たちが各自発見した資源を参加者メンバーとの即時な情報共有と、活動終了後にその他の人々との情報共有の様相について分析を行った。個々人には生活領域内の自然環境に対する利用の経験と範囲の差によって、それらに関する知識・認識が異なるが、集団で活動することによってそうした個々の知識と認識が即時な共有や、別の場での遅延した共有によって一定範囲内で共通する知識・認識になることが可能になるという結果が得られた。

引用文献

Woodburn, J. 1982. Egalitarian societies. Man, 17: 431-451.

Hewlett, BS. (eds.) .2014. Hunter-Gatherers of the Congo Basin: Culture, History, and Biology of African

Pygmies. Transaction Publishers.

Ingold, T. 2011. Being alive: Essays on movement, knowledge and description. Taylor & Francis.

Takada, A. 2016. Unfolding cultural meanings: Wayfinding practices among the San of the Central Kalahari. In
W. Lovis & R. Whallon (eds.), Marking the Land: Hunter-gatherer creation of meaning in their environment. Routledge, pp.180-200.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 二文字屋脩・園田浩司・彭宇潔	４．巻 83－4
２．論文標題 第12回国際狩猟採集社会会議（CHaGS-12）参加報告	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 3－8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 彭宇潔	４．巻 42－7
２．論文標題 アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民とたばこ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 月刊みんぱく	６．最初と最後の頁 10－11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 彭宇潔	４．巻 45(3)
２．論文標題 個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態 ―カメルーン東南部のバカを事例に―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国立民族学博物館研究報告	６．最初と最後の頁 441-469
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00009641	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yujie Peng, Atsushi Nobayashi	４．巻 106
２．論文標題 Cross-cultural Research Comparing the Hunting Tools and Techniques of Hunter-gatherers and Hunter-gardeners	５．発行年 2021年
３．雑誌名 “Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present” (Senri Ethnological Studies)	６．最初と最後の頁 75-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 彭宇潔	4．巻 122
2．論文標題 火のある場所は台所だ-森の民の調理場-	5．発行年 2021年
3．雑誌名 vesta	6．最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yujie Peng	4．巻 76
2．論文標題 Rhythm and Synchronization: Cases from Baka People in Southeastern Cameroon	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Techniques & Culture	6．最初と最後の頁 in press
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Yujie Peng
2．発表標題 Residence styles among small-scale societies: cases from central Africa and southeastern Asian
3．学会等名 Cross-Cultural Research 2020（国際学会）
4．発表年 2019年～2020年

1．発表者名 彭宇潔
2．発表標題 狩猟採集民バカに見られる景観情報の共有―集団採集活動を事例に―
3．学会等名 日本アフリカ学会第55回学術大会
4．発表年 2018年

１．発表者名 Yujie Peng
２．発表標題 Cutting: from play to work among Baka children in southeastern Cameroon
３．学会等名 12th Conference on Hunting and Gathering Societies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yujie Peng
２．発表標題 "What we learnt from CHaGS12", The Closing Plenary
３．学会等名 12th Conference on Hunting and Gathering Societies（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yujie Peng
２．発表標題 Rhythmical life: cases of cutting activity among the Baka
３．学会等名 Techniques & Culture International Meetings "Waza on the Move: Ineffable arts of learning"（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 彭宇潔
２．発表標題 カメルーン東南部における地域住民の居住形態-狩猟採集民バカと焼畑農耕民コナンベンベ、農耕民ンジメを事例に-
３．学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 木村大治・花村俊吉	４．発行年 2021年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 in press
３．書名 出会いと別れ―「あいさつ」をめぐる相互行為論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関